

秋田まで今度三十里余あり、烽候ハとふ火
と訓も日本書紀 繼體天皇八年三月
伴波築城於子吞帶沙而連滿奚異國の事也置
烽候郎閤以備日本とあり、又虞の云、乱を
討ハを臣の味方へ急を告ぐの儀、之を平記
一、是に海大に乱て一日も未安、狼煙、醫天
親波動地云々、狼煙ハ烽候と同じ、東部賊
ハ舉烽伐鼓申令三驅とあり、又源ハ烽
作ふ接といふハ出羽府を言上郡へ遷して
ハ及程、源を言ハ狼煙を立てても更接を言ふ事

あり、海一、さとの公なり、一、海国の南川の向
ハ飯表塚といふ、山あり、其形飯を盛る
おとくおれハかくいふ、にやといふ人あり
今年そまに於て能山形を見る、に牛の脊
ハ似てある、ハ長一、又一、説小姓古弘法大師
け所にあつて形を言ふ、ハ山、一、て新塚
なりといふ、人ハあれ、た羽原記、たの原、ハ
ハ飯表塚と申、中て新塚とはな、一、予按、
るに、ハ山古、形作を設くる、ハ、一、て中、
塚といふ、を女文字ハ、むより塚と云ふ